

2018年9月10日

ニューズレター9月号

～ミッション2030～

ミニ福音ワークショップ

「福音を生きる工夫・伝える工夫」(実践編)

日時：9月2日(日) 13:00～15:30、 場所：信徒会館ヨセフホール

参加人数：82名(内、英語グループから14名、スペイン語グループから3名、
分かち合いグループ数：12)

式次第：13:00～13:10 歌(テゼ「何も持たずに」)・挨拶・流れの説明

13:10～13:30 今までの振り返りと、本日のテーマについて(英 隆一朗神父)

13:30～14:40 グループに分かれての分かち合い

テーマ：①福音を生きる工夫、伝える工夫。どういうことを意識しているか？

②実際に福音を伝えてみて上手く行った体験は？工夫して上手く行った点は。

14:40～15:20 各グループからの発表

15:20～15:30 まとめ(英 隆一朗神父)

1. 福音を生きる工夫・福音を伝える工夫と、その体験 — 英 隆一朗神父

これまでの2回の福音ワークショップでは、「あなたにとって福音とは」、「福音を生きる」というテーマで分かち合ってきたが、今回は、なるべく具体的な体験や試みにフォーカスして、それを具体的に生き、伝えるための工夫に関して分かち合いたい。今後どこかで、それらの「工夫集」の様なものをまとめられたらと考えている。

工夫そのものが神の恵みであり、一人一人にとっての恵みやカリスマはそれぞれであるが、以下「工夫」についていくつかのお話をしたい。

<福音の定義>

神の愛(神様が無条件で私たちを愛して下さっていること)であり、そのことを伝えるのが「福音を伝えること」であると思っている。

<福音を生きる工夫>

① 一日の終わりに祈る(仕事モードだけで一日を終わらない)

- ② 心と体を整える（バランスの取れた生活）：現代の生活は、放っておくと消費に支配されてしまいがちになり、バランスを崩して病気になってしまうことにも繋がりがねない。大自然や芸術に触れる事によりバランスを取ることが大切。
- ③ 日々の苦しみを受け入れてゆく：強くあろうとするのではなく、弱さを受け入れてゆくことの方が福音的な生き方ではないか。弱さを受け入れるのが神の愛であり、それにより周りの人々の弱さを受け入れることにもつながる。

<福音を伝える工夫>

- ① 積極的に生きる：自分の内に籠って、小さくまとまるのではなく、勇気をもって出かけて行く。
- ② 聞き上手になる：他人の話をよく聞くこと。
なお、これまでの分かち合いでも出されている通り、家族との関係が一番難しいと思われる。

2. 各グループからの分かち合いの内容の発表

【グループ①】

- ・主の祈りを日常の忙しい中でも唱える。また、何事も聖書に基づいて行動する。
- ・相手の立場を重んじる。
- ・しっかりと予習して、主日のミサに与る。
- ・他人のために祈ることが使命。一緒に祈ることを感じながら祈る。
- ・時がよくても悪くても必ず動く。
- ・洗礼を受けておられない方に、祈っていることを伝える。

【グループ②】

- ・職場で、クリスチャンであることを伝えて生きる。
- ・キリスト教の特殊な言葉は使わない。
- ・誕生日やクリスマスに、みことばのカードを贈る。祈っていることを伝える。

【グループ③】

- ・神様を直接的に伝えるよりも、間接的に伝える。
- ・周りの人から「変わっているね」と言われる生き方をして行く。
- ・友人と会う時は、待ち合わせ場所を教会の近くにして、教会に招いてみる。
- ・みことばのカードには、「神様」云々と書くのではなく、詩編のことばを使って自然に伝えるのがいいのではないか。

【グループ④】

- ・キリストの体の一部分という思いのもとに、使命を生きる。
- ・周りの人にクリスチャンであることを示して生きる。

【グループ⑤】

- ・相手を思いやって生きる。

- ・伝えることがはっきりと分からない。
- ・家族に対して福音を伝えることが難しい。
- ・仲間とお酒を飲みに行った際に聞かれたら、自分の教会の話をするようにしている。

【グループ⑥】

- ・自分のありのままを見せる。正直に生きる。
- ・神様に委ねながら生きる。
- ・嫁ぎ先で、最初はクリスチャンということで警戒されたが、結局全員が洗礼を受けた。

【グループ⑦】

- ・福音は伝えるのではなく、にじみ出るもの。ぐいぐいと突きつけるのではなく、余白として現わされるもの。
- ・社会に出て生きている我々が福音のエッセンスを体現していることが大切。この世に縛られるのではなく、何故か生き生きとしていること。

【グループ⑧】

- ・会社の中で、カトリックであることを伝えたら、周りの反応は思わしいものではなかった。しかし、それが現実なので、それを受け入れて生きる。
- ・両親を受洗させるべく、具体的な計画を立て実行して行き成就した。

【グループ⑨】

- ・家族に対しては、自然にしていれば伝わる。特別なことはせずに、ありのままにしていればいい。

【グループ⑩】

- ・我々が語るにより伝えるというよりも、相手の中にイエス様の種があるので伝えることが出来るということ。
- ・語る時に、カトリック用語は使わない。(例えば、「苦しみを受け入れる」について、この「受け入れる」の部分に関してしっかりとする日本語を見付ける。)
- ・職場でクリスチャンですかと問われたり、キリスト教のことについて質問されたら、よい機会なので自信を持って、しかし、押しつけがましくなく、自分の信仰について話したり、説明をする。
- ・カトリックを押し付けずに、そうかと言って隠さずに生きる。

【グループ⑪ 英語グループ：1】

- ・洗礼を受けたのはチャレンジであった。
- ・大学時代にミサに関わる様になり、信仰を受け入れることにつながっていった。
- ・宣教を行うまでのキャパシティはないが、聖書のことばが自分の励みとなっている。
- ・祈りが大切。
- ・働くのは私たちの力ではなく、聖霊である。
- ・どのようなタイミングで、どのような言葉を使うのか、祈りながら見極めている。

- ・モーツアルトのレクイエムを聴いたのが洗礼を受けるきっかけであった。
- ・セブン・イレブンの100円コーヒーを座って飲みながら隣の人に話しかけてみる。

【グループ⑫ 英語グループ：2】

- ・ミッションスクールで神様のことを知り、聖書のことが身についた。妹といっしょに、聖書には永遠の命が書かれていることを共に感じる事が出来たことが妹の洗礼につながり、更に両親も洗礼を受けた。
- ・対立している人の前ではへりくだる。
- ・自分の生き方をもって信仰を示して行く。
- ・日本語では上手く伝えられないが、生きざまをもって主を伝えて行く。
- ・職場でのゴシップには加わらない。周囲からは、なぜいっしょに憤らないのかと言われるが、「私はクリスチャンだからです」と答える。
- ・外国人は日本に仕事をしに来ているだけではなく、宣教者として日本に来ている。植えられたところでキリスト者としてどう咲くのかを考えて行きたい。
- ・相手が心を開いた時に伝える。信頼してくれた時に伝えて行く。
- ・どのような相手であっても、そこに入って行き、それらの人々と接しないことには、宣教は始まらない。
- ・お互いが、相手のプレゼンスをイエス様だと思うことが大切。

3. まとめ（英神父）

- ・世界的にも、日本は福音を伝えることが最も難しい国の一つと思われる。これをどうして行くのかは小さな問題ではなく、皆で考えて行く必要がある。
- ・イグナチオ教会はいろいろな面で恵まれているので、恵まれていることに感謝しながら活かして行かなければならない。
- ・一人一人には使命があるので、それを生きることが大切。
- ・職場に神の愛を持って行けるようになればよい。

次回の、第3回福音ワークショップは、11月4日（日）の15時からヨセフホールで開催します。

以 上

文責：英神父とミッション2030促進チーム